

# 終身会員だより

【第27号】

発行 日本教育会大阪府支部事務局

〒543-0021 大阪市天王寺区東高津町7-11

たかつガーデン(大阪府教育会館)408号

TEL 06-6768-5552

FAX 06-6777-3121

## 会員の皆様

終身会員運営委員長 井上 奠 夫

日本教育会大阪府支部終身会員(教育振興基金会員)の皆さまには、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、私こと、このたび杉本一三様の後任として運営委員長を勤めさせていただくことになりました。終身会員運営委員会は、会員の皆さまのご協力を頂きながら、大阪府支部の各種事業実施のサポート役として活動しており、その一員として参加できることを光栄に思います。なにとぞご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

ところで、過日、テレビ(NHKアーカイブス)で「狩りをする蜂」という番組を見ました。それをきっかけにファーブルの「昆虫記」を読み返したのですが、ミツバチやスズメバチ以外にも多様な蜂がいて、中には特定の昆虫を狩る蜂がいるということでした。

ファーブルが「狩り蜂」の研究を始めたのは、「昆虫記」の執筆に先立つこと30年ほど前、31歳の時、当時の昆虫研究の先駆者だったレオン・デュフルの論文を読んだのがきっかけだったと、「昆虫記」に書いてあります。

ファーブルの若い頃に、蜂が幼虫のエサとして昆虫を土の中に埋め、しかもその昆虫が腐らないことは知られていました。しかし、昆虫が腐らない仕組みは良く分からず、デュフルはタマムシツチスガリという蜂を研究した論文で、土の中に埋めたタマムシが腐らないのは「未知の防腐剤」を注入したからだと推論していました。

ファーブルは、そもそも「未知の防腐剤」とは何か、そしてそんな便利なものを蜂が持っているのだろうかという疑問に思い、自分流の方法を編み出しながら研究を進め、ついに、蜂は虫を殺しているのではなく、毒を虫の神経に注入して麻痺させ、生かしたまま保存していることを発見しました。さらに、解剖して調べ、神経節が集まった部分を正確に刺していることも解明しました。

ここで、私の疑問は、蜂はどうして昆虫に神経節があると分かったのだろうか、どう仲間にそれを伝えていったのだろうか、という風に広がっていきますが、それはさておき、ファーブルはこれ以後自己流の研究方法を改め、デュフルの本格的な手法を学んでいきます。

「昆虫記」には、「暖炉の薪はすでに準備されていたのである。それを燃え上がらせる火花だけがなかった。まったく偶然に読んだレオン・デュフルの論文がこの火花だったのである(奥本大三郎氏訳)」と書かれています。

「好きこそものの上手なれ」とは良く言われる言葉ですが、素人の昆虫観察が趣味であったファーブルを一流の博物学者にしたきっかけは、そのようなことであったと言います。

翻って、私たちが目の前にしている子どもたちも、一人一人がこれから燃え上がるべき「薪」を持っていることでしょう。

大阪府支部の各種研修事業の目標は、学校園で幼児・児童・生徒たちと直接向き合い日々奮闘されている現職会員の皆さまに、「薪」を燃え上がらせる「火花」をお届けすることに尽きるかと存じます。私たち運営委員会もそのお手伝いをして参りたいと考えております。

大阪府支部の会員の皆さまと、支部の各種事業の機会にお目にかかれることを楽しみにしております。重ねて今後ともよろしくお願い申し上げます。

○終身会員運営委員並びに支部事務局の紹介(令和7年度)

終身会員運営委員会	(委員長) 井上 奠 夫	(副委員長) 今野千恵
	(委員) 杉本一三、 稲田純子、 小牟田啓、 上田律子、 池田美保子	
大阪府支部 事務局	(支 部 長) 田中保和	(事務局 長) 山口忠義
	(事務局次長) 高木恒夫	(専任理事) 太田順子、 木村俊一